

あいぽーと通信

令和7年
(2025)
3月発行
第72号

トピックス
Topics

- 特集：あいぽーと徳島 同和問題講演会「私は部落から逃げてきた」
- 人権教育啓発リーダー養成講座(後期)第7回 インターネット上の誹謗中傷の実態～加害者にも被害者にもならないために～
- 「人権教育啓発・男女共同参画の推進」啓発行事・フレアキャンパス講座「ジェンダー平等について一緒に考えてみませんか？」
- 図書・DVDのご案内 ●「臓器移植かるた」貸し出ししています ●あいぽーと徳島情報

あいぽーと徳島では、人権に関するさまざまなイベントを開催しています。

特集

演題

私は部落から逃げてきた

あいぽーと徳島 同和問題講演会

令和6(2024)年11月23日開催

■部落について知らされた 地区学習会

私は西日本新聞という九州の地方紙で記者をしていたジャーナリストです。新聞記者時代に自身も被差別部落出身ということもあって部落差別に関する連載記事を書いたことがあります。子どもの頃にはそもそも部落という言葉の意味もよく知らず、それを意識したのは小学校低学年の時、地域で行われた「地区学習会」という勉強会を通してです。そこで部落の存在や、それを原因に差別されるということを教えられていました。結婚差別の体験などを聞いて危機感を抱きました。私が私はその危機感に引き合わず、逆に地区学習会でも反抗的な態度をとったりして、部落差別から逃げるようになり、特に部落問題学習に対して反発を始めた。今振り返ってみると、「部落に生まれただけで差別される人間じゃないぞ」ということを暗に周りに伝え、強がって自分と部落問題を遠ざけようとしてたんじゃないかなと思っています。

■勇気ある被爆者の声に 感じた後ろめたさ

そんな私が自分の出自を明かして部落問題を書くことを決めたのは長崎で原爆の被爆者取材したからです。原爆投下直後の惨状からその後の差別まで、辛い思い出を語ってくれたにも関わらず「取材してくれてありがとう」と感謝してくれました。本当はやりがいを感じるべき言葉なんですけど、社会問題を伝えようとする被爆者の皆さんと比べて、部落問題の当事者でありながらそれを口にしない私がすごく後ろめたく感じ、全国水平社100年の節目にあたる2022年、自分の言葉で部落問題の新聞記事を書くかと思いつき、地区学習会に一緒に出た仲間や当時教えてくださった恩師の方を訪ねてみることにしました。

幼なじみの隼人君(仮名)は好きな人に告白した時、相手から「実は私、部落の生まれなん

だよね」と語ってくれたことにも

のすごい覚悟を感じ、子どもの頃

に地区学習会で部落差別につ

いての知識を得られて良かったと

言いました。姉は交際相手に、

将来のトラブルを避けるために自

分が部落の出身だと伝えるよう

にしていたそうです。いろんな人

の努力があつて、あからさまな部

落差別は昔に比べて確実に減って

はいますが、無くなっているわけ

ではありません。部落差別はふとした瞬間に

起きてしまい、取り返しのつかない

傷を負ってしまう人がいること

は今も昔も変わらないのです。

私に初めて部落差別の話をして

くれた方にも、改めて話を聞かせ

てもらいました。結婚差別を受け

た体験を通して子どもたちに故

郷への誇りを教えてくれた孝さん

(仮名)。結婚後に被差別部落出

身者であることが相手の家族にば

れた結果、離婚

することになって

しまったお兄さん

講師：西田 昌矢さん

にしだ まさや
ジャーナリスト

あいぽーと徳島情報

あいぽーと通信 72号

令和7年度 第1回 あいぽーと徳島研修会

人が人をいじめること…セクハラ、パワハラ問題を考える

日時 令和7(2025)年4月23日[水] 13:30～15:00

会場 アスティとくしま2階 第6会議室
(徳島市山城町東浜傍示1-1)

講師 北仲 千里(きたなか ちさと)さん
広島大学 ハラスメント相談室 准教授(ハラスメント対応の専任相談員)

参加費
無料

申込
必要

講演会をホームページでご覧いただけます。 配信中

第1回
配信講座
令和4年8月
配信開始

マイリティデザイン ～すべての弱さは、世界ののびしろ～

●講師：澤田智洋さん(コピーライター)

第2回
配信講座
令和4年11月
配信開始

被爆体験伝承講話 ～ガルボ(ヴィオラとピアノ)の音色とともに～

●語り部・ヴィオラ演奏：沖西慶子さん ●ピアノ演奏：長沼靖子さん

第3回
配信講座
令和5年1月
配信開始

農業を食糧と職業にできる社会へ ～生きづらさ・働きづらさのある人とともに～

●講師：小島希世子さん(NPO法人農スクール 代表)

第4回
配信講座
令和5年8月
配信開始

～超高齢社会の超逆転発想！ 高齢者が若者を支える地域づくり～ おんぶにだっこプロジェクト

●講師：加藤香苗枝さん(株式会社SMIRING 総括マネージャー)

第5回
配信講座
令和5年11月
配信開始

北朝鮮よ、姉 横田めぐみを帰せ！

●講師：横田拓也さん(北朝鮮による拉致被害者家族連絡会 代表)

第6回
配信講座
令和6年1月
配信開始

「無料塾」から見える、いま社会に必要なもの

●講師：大西桃子さん(フリーライター／中野よもぎ塾 代表)

第7回配信講座 令和6年8月配信開始

地域の災害防災力を高めよう ～令和6年能登半島地震を踏まえて～

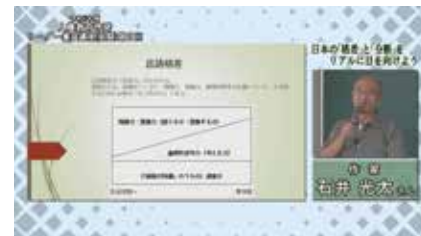
●講師：栗田 暢之さん
(認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 代表理事)



第8回配信講座 令和6年11月配信開始

日本の「格差」と「分断」を リアルに目を向けよう

●講師：石井 光太さん(作家)



第9回配信講座 令和7年2月配信開始

インターネット上の誹謗中傷の実態 ～加害者にも被害者にもならないために～

●講師：山口 真一さん
(国際大学グローバル・コミュニケーション・センター 准教授)



主催・問い合わせ：あいぽーと徳島(徳島県立人権教育啓発推進センター) Tel.088-664-3719 ホームページ <https://www.aiport.jp/>

人権相談のご案内

あいぽーと徳島では、人権擁護委員・弁護士による人権相談を行っています。まずは電話にてご連絡ください。

Tel.088-664-3701

(徳島県男女参画・人権課分室)

※相談日は、都合により変更される場合があります。

一人で悩まず
お電話を

●人権擁護委員による相談

●弁護士による相談(要予約)

●弁護士によるインターネット上の人権侵害相談(要予約)

第2・第4土曜日(10:00～16:00)

(12:00～13:00を除く) 面接相談及び電話相談

第1・第3金曜日(13:00～16:00)

面接相談

偶数月の第2金曜日(13:00～16:00)

面接相談

[編集・発行]

あいぽーと徳島

徳島県立人権教育啓発推進センター

指定管理者 特定非営利活動法人 徳島ヒューマンネット

〒770-0873 徳島市東沖洲2丁目14 沖洲マリンターミナルビル内

Tel.088-664-3719 Fax.088-664-3727

E-mail:info@aiport.jp

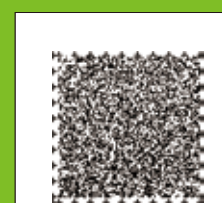
あいぽーと徳島 検索 <https://www.aiport.jp>

- 開館時間／午前10時から午後6時まで
- 休館日／月曜日(祝日の場合はその翌日)
- 年末年始(12月29日から1月3日まで)

●公共交通機関のご案内 JR徳島駅前から徳島市営バス⑥番のりば・徳島バス[中央市場線]に乗りし、[沖洲マリンターミナル]にて下車。



駐車場案内
お車を利用の場合、ビル西側駐車場の「あいぽーと徳島」と表記のある赤いコーンの場所に駐車してください。
満車の場合は、ビル北側の県営有料駐車場をご利用ください。
●3時間まで200円



(音声コード)



(音声コード)

インターネット上の誹謗中傷の実態 ～加害者にも被害者にもならないために～

講師:山口 真一さん (国際大学グローバル・コミュニケーション・センター 准教授)

インターネット・スマートフォンが普及し、人類総メディアの時代になった。SNSの普及は非対面・対多数のコミュニケーションを可能にした。誰もが自分の意見をネットにのせて拡散することができる時代で、毎日どこかで著名人、一般市民を問わず、情報を発信した人に対してもネット上で多数の批判や誹謗中傷が行われる「ネット炎上」が起こっている。

この背景には、刺激的な表現で人々の注目を集め閲覧数を増やし、広告収入を狙う「アテンション・エコノミー」や、個人の見たくない情報は排除され、見たい情報に偏った情報を得る「フィルターバブル」「エコーチェンバー」が見られ、視野を狭くし、意見を極端にするメカニズムがある。極端、ネガティブな書き込みをするネットユーザーは約40万人に1人に過ぎないが、これがネット炎上し、マスメディアの報道で取りあげられ、より拡散している。

炎上に加担する動機の多くは「正義感」にあり、自分の考えが正しいと思ったときこそ注意が必要である。我々自身が「極端な人」にならないために、①情報の偏りを知る ②一呼吸置き、自分の「正義感」に敏感になる ③自分を客観的に見る ④情報から一度距離をとってみる ⑤他者を尊重する、この5つを心に留め、一人ひとりが心がけることで、豊かな情報社会を作ると考える。

ジェンダー平等について 一緒に考えてみませんか？

講師:三輪 敦子さん (アジア・太平洋人権情報センター(ヒューライツ大阪)所長)

令和6(2024)年に世界経済フォーラムが発表した「ジェンダーギャップ指数」において、日本は世界146カ国中118位であり、日本の順位が低いのは①女性管理職の少なさ ②男女間賃金格差 ③女性議員の少なさが主な理由である。世界的に順位が上がっていかない最大の理由は、世界に起こっている変化が日本では起こっていない、ジェンダー平等に関する世界の潮流から取り残されていることである。

一方、都道府県別のジェンダーギャップ指数と徳島県について見ると、女性の役員や管理職の割合は全国トップである。47都道府県のうち、教育は2位、行政は3位、経済では4位で、4年制大学の進学率は全国で最も男女差が小さい。教育、経済分野におけるジェンダーギャップの小ささは国内トップレベルである。しかし、女性議員が少なく、政治は33位となっている。

ジェンダー平等を推進するためには、有害な慣習、意識・無意識の偏見、固定観念を見直すことが考えられる。固定観念は家庭、メディア、教育すべてに存在していて、意識化・可視化することも難しい。

現在の状況を変えるためには、「女だったら」「男のくせに」等、性に分けて考えること・発言することをやめること。女性の自己肯定感を育むこと。女性も自分の力を信じること。コンフィデンス・ギャップ(昇進にあたっての自信の男女差)への対応が考えられる。女性を育てる3つの「き」(期待する・機会を与える・鍛える)を実践することが肝要である。そして、政治的意思、トップのコミットメント、具体的制度の構築と実施、社会の意識変革が不可欠である。今後、政治分野でも女性が活躍し、女性、男性すべての人が幸せに暮らせる徳島が実現されることを期待している。

図書・DVDのご案内 貸出資料を随時追加しています。人権研修、学習にご活用ください。



DVD

大切な人

企画:兵庫県・公益財団法人兵庫県人権啓発協会
制作:東映株式会社



DVD

誰ひとり取り残さないための
職場の人権
シリーズ②
心をつなぐ、
はじめの一步

企画・制作:東映株式会社 教育映像部



図書

あなたの強さは、
あなたの弱さから
生まれる

株式会社アスコム
小澤 竹俊



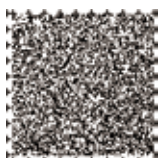
図書

〈声なき声〉の
ジャーナリズム
マイノリティの
意見をいかに
掲げ上げるか

慶應義塾大学出版会
田中 瑛



徳島市立高等学校ドナーアクション
啓発委員会の皆さん



(音声コード)

「臓器移植かるた」貸し出ししています

公益財団法人とくしま移植医療推進財団と徳島市立高等学校ドナーアクション啓発委員会が共同で作成した「臓器移植かるた」を寄託いただきました。臓器移植について楽しく学んでもらうため、絵札の図柄はピクトグラム、読み札は分かりやすく表現され、解説集も含まれています。あいぼーと徳島にて貸し出ししています。ご活用ください。

も結婚する時は部落問題はどうしても考えなければいけない瞬間なんだと気付かせてくれました。

■部落差別を通して 家族を見つめ直す

結婚差別の話を聞かせてもらった後、関連して自分の家族がどういうふうになり立ってるのかなというのが気になり祖母にも声をかけました。私の父と母は違う場所で生まれ育ったのに被差別部落同士で結婚しており、なぜ親戚の多くが被差別部落の出身者なのかずっと疑問だったからです。祖母が言うには、それはトラブルが少なくなるようにするためだと言います。実際に親戚の一人は被差別部落出身じゃない人と結婚していましたが、大変だったと祖母は言います。被差別部落の人と結婚することは、相手にとつて自らが差別される側になるかもしれない瞬間だからです。

最後に取材したのは、私の母です。祖母や姉の語り口とは違って、普段の母とは違う、重い雰囲気の中で語りでした。小学生の頃に経験した、参観日に友だちや保護者の前で被差別部落出身者であることをカミングアウトする「立場宣言」について、そ



れがどれだけの嫌だったかなどの話がありましたが、部落問題について取材して記事にし、自分の出自を公にすることについても、「本当にそれでいいのか、無理をしていないか」など心配されました。「いろんな話をしたけど、あなたには普通で場所でも暮らしてほしいと思ってる」とも告げられ、言葉どおりに取ると「身近な人だけでも部落問題に関わりなく、平穩に暮らしてほしい」と受け取ることができですが、母の真意はシンプルに「差別のない世の中になってほしい」という意味で、母にとつては一番現実的な願いが口に出たんだと思います。

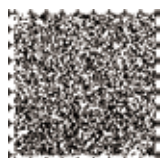
■誰にとつても 無関係ではないからこそ

部落問題以外にもいろんな人権問題があります。共通するの

は生きづらさであり、深刻であればあるほどなかなか簡単に言えるものではないから、多くのの人にとつて人権問題が身近な話であると理解してもらえないものです。私たちも人権問題取材する時、肩に力を入れて取材に行こうとするんですが、それは心の中で「自分からは遠い話だ」と思っているからです。しかし実際にはそうではなく、誰にとつても身近な話で、言わないだけで友達や恋人、職場の同僚の話かもしれない。カミングアウトを受ける機会はそうないかもしれないませんが、あった時に身近な話だったんだなと自覚するでしょう。多くの場合、生きづらさを感じている人は社会の少数派です。社会を変えていくことは容易ではありませんが、だからこそマジョリティが何ができるかを考えて行動を起こさないといけないんだと思います。私は部落問題の当事者として目の前に立たせてもらっていますが、他の問題においてはマジョリティです。だからみんなが無関係だとは考えず、人権問題にはみんなで取り組んでいかなければいけないことをお伝えさせていただきます。

講師プロフィール 西田 昌矢(にしだ まさや)さん ジャーナリスト

1993年に中国地方で生まれた。2017年11月に西日本新聞社に入社。長崎総局で原爆や外国人の長期収容問題などを取材し、21年から朝倉支局長を務めた。全国水平社設立100年の節目に合わせた企画「人権新時代」の中で、連載「記者28歳 私は部落から逃げてきた」を担当。被差別部落に生まれたことを明かしたうえで、現在も残る部落問題を伝えた。23年には続編「記者29歳 私は部落から逃げてきた」を執筆。24年6月に退職し、フリーのジャーナリストとして活動している。



(音声コード)